

眠り姫に甘いキスを



登場人物 紹介

ベルタ王国・国王夫妻

ウルリーカの父母。
ウルリーカにとっては
良い両親だったが……

エーレンベルク国王

ヴィルヘルムの父親。
人当たりはいいが、
一筋縄ではいかない一面も？

クラウディオ

ウルリーカに
接近してきた貴族の青年。
ベルタ王国の復興を
目指している。

ドロテア

ウルリーカに最後の祝福を授けた
魔女ドロテアの三代目。
エーレンベルクの宮廷で
保護されている。

ヴィルヘルム

ベルタ王国を滅ぼした
エーレンベルクの侯爵の子孫で、
現・王太子。キスにより、
ウルリーカを目覚めさせた。

ウルリーカ

ベルタ王国の姫。魔女にかけられた
呪いの影響で、18歳の誕生日に
永い眠りについた。目覚めるには、
王子のキスが必要だと
いわれていたが……

序章 ひとりぼっちのお姫様

「やめなさい」

男の声が、風に運ばれてウルリーカの耳へと届く。

冷静な声色と同様に、ウルリーカに吹きつけてくる風は肌が粟立つほど冷たかった。

「はやまるのはよしなさい、ウルリーカ。君に何かあったら、みなが悲しむ」

こんな状況だというのに、どうしたわけか男はちっとも動じていないようだった。まるでウルリーカに、ここから飛び降りる度胸などあるはずもないと言わんばかりだ。

ウルリーカは、濃緑色のつぶらな瞳をうるませた。目の前の男が怖かったのもあるし、何よりも突如として突きつけられた現実を、受け入れることができなかった。

——咲いたばかりの薔薇を連想させる、あざやかな赤毛をした十七、八の少女だった。腰まで伸びた長い髪は、彼女の小柄な体を守るようにやわらかく波打っている。丸い瞳に、小さな鼻と口。

小動物を連想させる、いかにもおとなしそうな容姿。そんな彼女の華奢な体は、このとき、七階建ての塔のつべんに立っていた。

風が再び吹きつけて、ウルリーカの赤毛を舞い上げる。反動で体が揺れた途端、あまりの高さに

眩暈がした。眼下に広がるいばらの群れに、胃の底が凍りつく。

落ちる——と思った瞬間、ウルリーカは反射的に足に力を入れ、それを食い止めていた。

「——」

自分の取った行動なのに、その事実がウルリーカを打ちのめした。

(そんな、わたし……ここから飛び降りるためにやってきたのに)

それなのに、風で落ちそうになったら怖いと感じてしまうなんて。

「そこは危険だ、ウルリーカ」

すこし離れたところで、男が言った。

黒い髪の、驚くほどの美丈夫だった。年のころは二十代半ば、伶俐な瞳は透き通るような琥珀色。すらりと背が高く、足元まで覆い隠すようなガウンを羽織っている。ほとんど非の打ちどころのない美貌だが、唯一気になる点をあげるとすれば、前髪が長すぎるくらいだろうか。しかしそれさえも、彼のあか抜けた美貌を彩る材料のひとつになっている。

男は今にも塔の縁から飛び降りようとしているウルリーカへ、すつと手を伸ばす。ふたりの間には、大人の男の歩幅十歩程度の距離が開いていた。

「こちらへ来なさい」

「——いいえ」

「いいから、おいで。さきほどは君を傷つける言葉を選んでしまっただけが悪かった」

「いいえ、ヴィルヘルム様。あなたのせいではありません」

堪えきれずに、ウルリーカの目から涙がこぼれた。

「目が覚めたら何もかもが変わっていったのです。父も母も死んで、国は滅びていました。もう、わたしが生きる意味など、どこにも……」

「そのようなことを軽はずみに口にはいけない」

幼子を叱るように、ヴィルヘルムと呼ばれた男が言った。

「百年の眠りから目覚めた亡国ベルタの姫。君が今、ここにいることにはきつと意味がある」

「そのようななぐさめなんて……」

「なぐさめではないよ」

男の口調がわずかにやわらかくなった。

「仮に私のなぐさめであつたとしても、君が死んでいい理由にはならない。こちらへおいで、そこは危ない」

いつも淡々とした物言いをするヴィルヘルムが優しい声を出したことで、ウルリーカの心は揺れた。意を決してやってきてはいたが、本当はここに立つだけでも足がすくんでいた。

階段をのぼりながら、途中、何度もくじけそうになった。それでもなんとか勇気を振り絞って、あと一步踏み出すだけですべてが終わる場所までやってきたのに。

それなのに、直前になってヴィルヘルムがあらわれたのだ。

（どうしてヴィルヘルム様は、わたしがここに向かったことがわかったのかしら）

誰にも言わずに馬車を出したのに、なぜヴィルヘルムはウルリーカに追いつくことができたのだ

ろう。彼には、山のような政務があつたはずだ。何せ彼はこの王国の——ウルリーカの祖国を滅ぼして建った王国の、第一王位継承者なのだから。

「おいで。城へ戻って、一緒にあたたかい飲み物を飲もう」

ふたたび優しい声をかけられ、ウルリーカが唇を横に引き結んだ、そのとき——

（あつ——）

それは眠気と呼ぶには、あまりにも酩酊感が強い。強引にどこか遠くへとウルリーカの意識を連れていく、波のような、得体の知れない何か。耳の奥でキーン、と甲高い音が響く。

（だめ、わたし、まだ……）

それ以上、考えることはできなかつた。ふいに糸が切れたように、ウルリーカの体がその場にく

ずおれる。瞬間、床を蹴ってヴィルヘルムが駆け出した。落下しそうになった彼女の体を、寸前の

ところで腕の中に引き寄せる。

「ウルリーカ……」

ヴィルヘルムが呼びかけたとき、ウルリーカの体は眠りに沈みはじめていた。半開きになった赤

い唇から、穏やかな吐息が漏れる。そのことを確認して、ヴィルヘルムは肩から力を抜いた。

「……困った眠り姫だ」

風に乱れた姫君の髪を指で梳いた王子は、やがて目を細め、その香りを吸い込むように彼女の首

筋に顔をうずめた。ウルリーカの細い肢体が、ヴィルヘルムの腕の中ですっぽりとおさまる。

(いったい、どうして……)

眠りの海に浸りながら、ウルリーカの意識がたゆたう。

(この人は、わたしのお父様とお母様を殺した男の末裔、なのに……)

だからこんなふうに、体を預けるような真似はしてはいけない、はずなのに……
ウルリーカの細い背中を、ヴィルヘルムがいたわるように撫でさする。

はじめは、大きな手の平が自分を落ち着けてくれようとしているのだと思った。だが、次第にその動きは大胆になっていく。

(……何……?)

彼は逞しい片腕でウルリーカの腰をしつかりと抱き支えながら、もう片方の手で彼女の耳元を、子猫を甘やかすようにくすぐりはじめた。

「ん、……う」

浅い眠りについていていたウルリーカは、まだ肉体に与えられる刺激を感知することができた。そのため、敏感な個所に触れると声が出る。ただくすぐられるだけならば、ウルリーカも妙な気分になることはなかったのだが——このときのヴィルヘルムの動きは、人を落ち着かせるために取る動きとは、何か異なっていた。

ヴィルヘルムはウルリーカの耳元に唇を寄せ、耳朶をそっと食み、するすると頬をたどった指先で、彼女の鎖骨をなぞる。

(あ……あ……)

くすぐりたいような、もどかしいような感覚に、ヴィルヘルムの胸に閉じ込められていたウルリーカの体がびくん、と跳ねた。

「ウルリーカ？」

声が耳の中に注ぎ込まれてくるかのようにだった。ウルリーカの喉からか細い声が漏れる。

「ん、……う」

「ウルリーカ……、起きているのか？」

ヴィルヘルムはウルリーカの返答がないことを悟ると、指で弾力をたしかめるように、彼女の唇をなぞりはじめる。

(どうして、こんなことになったの……?)

吐息が間近に迫るのを感じた。きつとウルリーカは、あとすこしでキスをされる。

(誕生日のあの日までは……幸せだったのに……)

そしてヴィルヘルムは、彼女のふっくらとした唇に、自らのそれを重ねた。

——『眠り姫の目覚めには、王子のキスが必要です』

それは百年前。ウルリーカに授けられた、彼女を守る祝福の一節であった。

一章 眠り姫の目覚めには

「十八歳のお誕生日おめでとう、ウルリーカ」

色とりどりの花束が差し出され、ウルリーカは濃緑色の瞳を輝かせた。

「きれいなお花……！」

白いほっそりとした手で花束を受け取り、つぼみがほころぶような笑みを浮かべる。

「ありがとうございます、お母様」

控えめにフリルがあしらわれた白いドレスに身を包み、赤い髪をゆるやかに背に流したウルリーカは、花盛りの娘ならではの美しさを放っていた。全身に若葉のようなみずみずしさをにじませ、彼女自身が淡く輝いているかのようだ。

それもそのはず、今日は彼女の十八歳の誕生日である。少女のあどけなさと、大人の女に差しかった頃のほのかな色香が、いつそうウルリーカの魅力を際立たせていた。

向かい合った彼女の母は、娘と同じ色の瞳を愛おしげに細めて微笑む。

「本当にきれいになって……」

大きな窓から日差しが差し込む石造りの一室は、壁にタペストリーが飾られていることもあって、あたたかな雰囲気を満たされていた。うさぎの毛を使った絨毯じゅうたんの上にはマホガニー製の家具が置か

れ、贅沢ぜいたくとまでは言えないが品の良いしつらえになっている。

「今日はお父様もこのクルックシャンクの離宮に足をお運びになります」

母の言葉に、ウルリーカはぼつと表情を明るくさせた。

「お父様が？」

「ええ、お昼ごろには到着されるでしょう。久しぶりに家族で食事がとれますね」

「——うれしい！」

花束を抱きしめ、ウルリーカは喜んだ。

赤い薔薇の咲き誇る七階建ての石の城、それがウルリーカに与えられたクルックシャンクの離宮である。宮廷から馬車で二時間ほどの距離にある、どこか強固な要塞を思わせる建物——彼女はここで、生まれたときから十八年にわたり両親と離れて暮らしていた。

王国ベルタ。国王夫妻のひとりむすめであるウルリーカが、静かに、国民の歓声とは無縁に、暮らしてきたのには理由があった。

「では、わたしにかけられた呪いはもうとけたのですね」

ウルリーカは母に向かってうれしそうに身を乗り出した。

「それは……」

「わたしはようやく、お父様とお母様と一緒に暮らせるのですね」

「いいえ、それはまだ……」

母であるベルタの王妃、ラウラが言葉を濁にごしたため、それまで喜びに満ちていたウルリーカの顔

に、悲しみが広がっていった。

「そんな……どうしてですか？」

「呪いのせいよ、ウルリーカ。それはあなたも知っているでしょう？」

「でも、わたしが生まれたときに魔女から受けた呪いは『十五歳の誕生日に死ぬ』という内容だったのでしょうか？ あれからもう三年も経ちました。けれど、わたしはこうして元気に生きています。ですからきつと、もう外に出ても大丈夫なはずですよ」

「ええ、そうね。ウルリーカ……」

ラウラは悲しげに手を伸ばし、愛娘の頬に触れた。

「でもそれは、あなたが指をさすであろう糸車をお父様が国から焼き払ってくださったおかげなのです。そしてあなたが、わたくしたちの言いつけを守ってこの離宮で静かに暮らしているからでもあるわ。もしもなにか目立つおこないをして、そのせいであなたを失うことになったら……、わたくしたちは悔やんでも悔やみきれません」

「……お父様とお母様が、わたしの身を慮おもんばかってくださいているのはわかります。ですがおふたりは、心配のしすぎです。糸車の針に指をさしたって、人は死にません」

「本来ならば、あなたの言うとおり、人はそれだけでは死にません。ですから魔女の言った言葉には、きつと秘められた意味があるのです。それがわからない以上は、おめおめとあなたを外に出すわけにはいかないわ」

秘められた意味。そんなものがあることくらい、ウルリーカにだって察しはついていて。だがし

かし、いったいそれが何を示唆しきするのかまではわからなかった。

とにかくただ漠然と、十五歳の誕生日を乗り越えれば自分はまだもう大丈夫なのだと考えていた。だから、十四の年は用心に用心を重ねて生活した。十五になれば、愛しい父母と一緒に暮らせるのだと、それだけを心の支えに頑張ってきたのだ。

それなのに、十八の誕生日を迎えてもなお、ウルリーカは少数の使用人と、この石の離宮に閉じ込められたままだ。

「だって、あなた」

悲しげなウルリーカを諭さとすように、母が言った。

「あなたは今も、ところかまわずにことごと眠りに落ちてしまうことがあるでしょう？ わたくしたちはそれを魔女の呪いと考えています。あなたに眠り癖がある以上、呪いはとけたと言いがたいわ」

「た、たしかにわたしには、そういうところがありますが……」

ウルリーカはまごついたのち、すがるようなまなざしを母へと向けた。

「では……わたしはこの先もずっとお父様とお母様と、一緒に暮らすことはできないのですか？ これからも……ずっとずっとここにいなくてはならないのですか？」

「いいえ」

ラウラはもったいぶるようにして唇に笑みを刻んだ。

「今日、お父様がここに足をお運びになるのは……あなたの将来について、朗報があるからです」

「朗報？」

「——あら、あれは陛下の楽隊の演奏ではなくて？」

母が耳をそばだてたので、ウルリーカもつられて音のするほうへと顔を向けた。窓の向こうから聞こえてくるのは、管楽器による流暢な演奏だ。芸術をこよなく愛する父王は、いつも専属の楽隊を連れて歩いてきた。

「本当だわ、きれいな曲」

「行きましょう、ウルリーカ。きっと今日はあなたにとって、忘れられない一日になるわ」

母がここまで含みを持たせるといことは、きっとウルリーカの想像を超える、すてきな話が待っているに違いない。

「——はい、お母様！」

ウルリーカは期待に胸を膨らませ、父を出迎えるために歩き出した。

大陸西部に位置する王国ベルタは、絹、綿織物、毛織物、染め物などを主産業として発展を遂げた小さな国だ。

当代の国王ルイゾンは十三代目の王である。美しいものをこよなく愛する性分に生まれついた彼は、国内の有力貴族だった美貌の妻ラウラを大恋愛の末に娶り、幸せな結婚生活を送っていた。

——はずだったのだが。困ったことに、ふたりはいっこうに子を授かる気配がなかった。

周囲は王に側室をすすめたし、一時はそういった存在がいたことも間違いないのだが、いずれの

女の腹も膨らまず、まさか王は種なしかとささやかればじめる始末。もういつそ王弟や王に近い血筋の間から、養子を貰い受けるしかないのではと人々が頭を悩ませていたころ、やっと王妃が懐妊したのである。

国民は喜んだ。いくら発展を遂げようと、王に世継ぎがいなくては宮廷が乱れる。宮廷が乱れば争いになり、やがて内乱へと発展していくだろう。だから国王夫妻の間に生まれる子どもは、国民全員にとつても平和への希望だった。

そうして生まれたのが、赤毛の姫君ウルリーカである。

子どもが女兒であったことに人々はしばし落胆したが、それでも王の血を残すすべができたことに安堵していた。幸いにして健康な子どもだった。王は喜び、さっそくその子どもの生誕を祝うため、盛大な宴をもよおすことを決める。

そこに招かれたのが、十二人の魔女だった。

十

「あのとき……余がもうひとりの魔女を呼んでいたら。そうしたら、そなたがこんなことにはならなかったかもしれないのに……」

背の低い、ぼつちやりとした中年の男が、王冠を頭に戴きながらぼそぼそと呟く。この国の国王、ルイゾン十三世だ。

「まさか十一人目の魔女が祝福を授けた直後に、招待していなかった十三番目の魔女があらわれ、姫に呪いをかけるなど思ってもみなかったのだ。それも十五歳の誕生日に糸車の針に指をさして死ぬなど……。ああ、なんておそろしい」

くよくよと語るルイゾンを、妻のラウラがなぐさめた。
「過ぎたことを悔やんでも仕方ありませんわ、陛下。当時、陛下が招かなかった魔女には悪い噂しかありませんでした。招待しなかったのは親として人として、ごく当然のことです。それに彼女を招待したとしたら、魔女の数が十三になってしまっていたはずですよ。それは避けなくてはいいけません、十三という数字は縁起の悪いものですもの」

「ああ、そうだな……。そなたはまことに良い妻だ、ラウラ。そなたの顔を見ていると、ここどころ反抗的な態度を見せる家臣だとか、謀反の動きを見せる貴族だとか、そういつたいやなことをすべて忘れられる」

「まあ、陛下下つたら……。気鬱きうつなときは楽隊に明るい曲を演奏させるとよろしいわ。彼らは陛下のためだけにいるのですから。もちろん、このわたくしも」

「おお、ラウラ……！」

「陛下……！」

ウルリーカは、こつそりとため息をつく。

ウルリーカたちがいるのは、クルックシャンクの離宮にある食堂だった。細長いテーブルの上に赤い布が敷かれ、たくさんの料理がところせましと並んでいた。ハーブの詰め物をした鶏の丸焼き、

季節の野菜とひよこ豆のスープ、白身魚のテリーヌに、やわらかなパン。ゴブレットには搾りたての果汁がなみなみと注がれている。

そんな数々の料理を前に、父ルイゾンと母ラウラがうっとり見つめ合っていた。

娘が十八歳になってもなお、仲睦まじい両親の存在はウルリーカの自慢でもあった。だがしかし、こうして目の前で熱い視線をかわされてはたまらない。

「それで、お父様」

ウルリーカは口を挟んだ。

「すてきなお話があると、お母様からうかがっているのですが」

「おお、そうだった！」

大きく頷いた父が、ばん！ と手を打ち鳴らすと、黒いガウンに身を包んだよぼよぼの老女が、おぼつかない足取りで食堂に入ってきた。

ウルリーカは小首を傾げる。

「どちら様ですか？」

答えたのは、老女ではなく父王だ。

「この者はそなたが生まれたときに祝福を授けるはずだった最後の魔女だ。もともとは十二番目の魔女として招待していたのだが、十三番目の魔女があらわれ自分だけが宴に呼ばれなかった悔しさからそなたに呪いをかけたあと、おそれをなして逃げ出した魔女である」

「それは誤解でございます、陛下……！」

老女がかわいた唇を開いた。

「私は探していたのでございます。あの強力な魔女の呪いから、姫君をお助けする方法を……。そして見つけ出したのです。今日、ここへ参ったのは、その手立てをお伝えするため……」

「そうであつたな。して、魔女ドロテアよ。ウルリーカを救う手立てとはなんだ。申してみよ」
（わたしを、救う手立て？ それって……呪いをとく方法のこと？）

驚いて母へと顔を向けると、母はにこやかに頷いていた。その瞬間、ウルリーカの胸の中に喜びが広がる。

（これが、お母様のおっしゃっていた『朗報』なのね……!）

十五の年を超えてからずっと、自分はまだ大丈夫だと思っていたが、それでもいざ呪いが発動したらどうしようという気持ちは常にあつた。それがとけたと証明されれば、気持ちもやすらぐし、それに両親と一緒に暮らすことができる。

その場にいた面々が、嬉々として魔女の次の言葉を待っていた、そのとき――

どおん!

大地を揺るがすような轟音が鳴り響き、足がふらついた。

クルックシャンクの塔全体が、巨大な何かに突かれたようにぐらぐらと揺れる。

「な、なんだっ?」

父が母にすがりつきながら素っ頓狂な声をあげた。

「どうした、これは。天変地異か?」

「失礼いたします、陛下!」

部屋に飛び込んだのは、銀の甲冑に身を包んだ近衛兵だ。

「大変でございます、今すぐおかくれになってください!」

「何だと? いったいどうして余がそのような……」

「謀反でございます。エーレンベルク侯爵の兵が武器を手にせめてまいりました! 宮廷は既に制圧されています、急いでお逃げください!」

「何っ!」

（謀反? エーレンベルク侯爵? どういうこと?）

どおん!

どおん!

「あれは大砲でこの離宮の扉を撃っているのです。さあ、早く裏口から――」

「お待ちください!」

兵士の言葉を遮って、老婆が叫んだ。それまでの動作からは信じられないほどの、大きな声だった。

「今は姫に祝福を授けねばなりません。星のめぐりではこのときを逃してはならないと出ていて」

「ですが、そのような場合では……!」

「姫、ウルリーカ姫」

どおん!

再び轟音が響いた。老婆はよろめき、その場に膝をつく。ウルリーカはあわてて彼女に駆け寄って、細い体を支えた。

「大丈夫ですか？」

「姫、どうかよくお聞きを」

そのとき、老女の目に鋭い光が宿った。白く濁った目だったが、その奥には深いきらめきを秘めている。

「あなたは糸車の針に指をさして死ぬのではありません。眠りに落ちるのです」

「眠りに？」

老婆の指が、ほんのりと淡く光る粒子をどこからともなく掬い上げた。

そしてそれを、ウルリーカの額に導く。

「もしかしたらすこし長い眠りになるかもしれませんが、目覚めます。なぜならそれが運命にとって必要なことだから」

「運命、ですか……？」

「眠り姫の目覚めには、王子のキスが必要です。それまでは、いばらの棘があなたのことを守ります。あなたは、これから出会う誰かのためにいなくてはならない人なのです」

「では、わたしの呪いはまだ——」

とけていないのですか。そう問おうとした刹那だった。

ばあん！

扉を蹴破るようにして、たくさんの兵がなだれ込んできた。誰のともつかぬ悲鳴が響く。ウルリーカは恐怖に青ざめた。

瞬間、ふわりとした感覚がウルリーカの全身を包み込んだ。

大きな酔酩感はまるで波のように広がり、そして目の前で父が剣を突きつけられているにもかかわらず——ウルリーカの意識を、強引に眠りへと引き込んだ。

+

（お父様、お母様……）

暗闇の中だった。

（ここは……どこ？ なぜわたしは、こんなことに……）

こんなことに、と思ったが、いったい自分がどのような事態に陥っているのか、ウルリーカは把握できていなかった。周囲が暗いことはわかったが、それ以外はさっぱりだ。かたく目が閉ざされているせいで、あたりを確認することもままならない。

（剣を突きつけられたあのあと、お父様はどうなったの？ お母様は悲鳴をあげていたわ、ご無事かしら。あのおばあさんはわたしが眠りにつくと言っていたけれど……、何がどうなっているの？）
花の香りがする。薔薇の香りだ。どうして薔薇の香りが、自分のそばに？

（ここは怖いわ……どこだかわからないもの。お願い、助けて、誰か……）

そのとき、コツ、と静かな足音がウルリーカの耳に届いた。

コツ、コツ、コツ……。足音は規則正しく響き、徐々にウルリーカへと近づいてくる。なんとなく、相手は男なのではないかと思った。足音が重たげだったからだ。

(誰？ 何？)

確認したいのに、目が開かない。ふいに、頬にあたたかなものが触れるのを感じた。

それは男の手のようなだった。骨ばっていて大きく、すこしかたいが、指先は優しい。

触れられたことに對する不安は、不思議なほど生じてこなかった。相手に悪意がないことが、指先の動きから伝わってきたからかもしれない。

ウルリーカの頬に触れた指は、彼女の輪郭を撫でるように動き、そして唇へとたどり着く。

下唇を数度、軽く押された。まるで彼女の唇の感触をたしかめているようだ。

(何をしているのかしら……)

疑問を抱いた次の瞬間――

ウルリーカの唇にやわらかいものが押し当てられた。

「んっ……」

くちづけだった。

目を閉じていてもわかる。重なり合った唇が、ウルリーカの口を開き、舌を奥へと割り入れてきたのだ。

先ほどまで唇をいじっていたはずの男の指は、今はウルリーカの耳をいじっていた。ぞくりと体

が震える。

「ん、んんっ……」

鼻にかかった声が漏れる。久々に自分の声を聞いたような気がした。

ウルリーカが苦しげに息をついてもなお、くちづけは止まらなかった。相手は、角度を変えてより深くウルリーカの唇を貪る。縦横無尽に動き回る舌が、ウルリーカのそれを絡め取ってきゅうつと吸った。

「んっ、ふ……」

相手はほんのわずかな隙間さえ惜しむように、ウルリーカへと唇を重ね続ける。どれほどのときが流れたかわからないころ……ふいに視界の端が明るくなった。

「ん……、う」

くちづけを受けながら、ウルリーカはゆっくりと瞳を開く。

すると、そこでウルリーカの体の変化を察したのか、それまで彼女の唇を貪っていた相手が身を引いた。

「君は」

ウルリーカは何度かまばたきをした。頭の芯がずっしりと重い。唇は、まだキスの余韻を残してしびれていた。やがて焦点を結んでいった彼女の視界にあらわれたのは――黒い髪的美貌の男だった。年のころは二十代半ばだろうか、伶俐な琥珀色の瞳を持っている。

「目が覚めたのか」



男の声は驚きに満ちていた。

「わたし……」

(この人と、キスをしていたの?)

「君は、眠っていたんだよ」

「眠って……?」

まだまどろみの中にいるような心地でウルリーカが訊ねると、男は難しい顔で頷いた。

「ベルタの姫君、ウルリーカ……。よく、無事に目覚められた。我々は君を歓迎しよう」

膝を折られ、頭を下げられて、ウルリーカは返す言葉を失った。

(ど……)

目の前の男は、神妙な面持ちでウルリーカの反応を待っている。

(どうなっているの?)

十

昔々のお話です。

あるところに子どもができずに悩む王様と王妃様がありました。ふたりはとても愛し合っていました。なぜかいつかこうに赤ちゃんを授かる気配がありません。このままでは王家の血筋が途絶えてしまうと、王様は嘆きました。王妃様は神殿に通い詰め、毎日神様にお祈りをしました。どうかわ

たしたちの間に赤ちゃんをください、絶対に大切にします、と。

やがてふたりの間に女の子が生まれました。王様はたいそうお喜びになって、宴を開くことに決めました。そしてそこに、十二人の魔女を集めることにしたのです。

魔女はひとりずつ、お姫様に祝福を授けていきました。

ひとりは美貌を。

ひとりは才能を。

ひとりは美しい歌声を。

ひとりは心の優しさを……

そうしてたくさん祝福を受けた赤ちゃんが、十二人目の魔女によって言祝ことほがれようとした、そのとき。

宴に招かれなかった、十三人目の魔女が姿をあらわしたのです。

魔女はたいそう怒っていました。どうして自分だけ宴に招かれていないのか、なぜのけ者にされたのか。そのような王国の姫など死んでしまえばいい、いいや、死ぬよりもっとおそろしい目にあえばいい――

魔女は呪いをかけました。姫君は十五歳の誕生日に糸車の針に指をさして死ぬであろう、と。

王様はあわてふためきました。大急ぎで国中の糸車を燃やし、姫君を宮廷から離れた離宮に閉じ込め、世間から隔離して守ることを決めたのです。

そうしてお姫様は、無事に十五歳の誕生日を迎えることができました。十六歳の誕生日も、十七

歳の誕生日も迎えることができました。

けれど――

十八歳の誕生日を迎えたとき、お姫様に転機がおとずれました。国を謀反むほんが襲ったのです。

「謀反人に刃を向けられた姫君は、己の身を守るために深い眠りに落ちてしまった。閉ざされた石の城で、いばらの棘とげに守られながら」

「……………」

「以上、これが我が国に伝わる童話の内容になる」

「そう、ですか……」

ばたん、とそれまで開いていた本を閉じて、黒髪の男が怜悯れいひんなまなざしをウルリーカへと向けた。

「何か質問は？」

（そ、そんなことを急に訊たずねられても……）

赤い髪を大輪の花のように結い上げ、瞳の色よりいくらか明るい若葉色のドレスに身を包んだウルリーカの胸元には、たくさんの宝石で作られた首飾りがきらめいていた。

彼女の周囲をせつせと女官たちが行ったり来たりして、ドレスの裾をあげたり、髪のはつれをなおしたりと忙しそうに働いている。

あたたかな日差しの降り注ぐ、広い部屋の中だった。ずっしりとした重みを感じさせる白木造りのテーブルと椅子、ソファ、鏡台はそれぞれ華美な金色の装飾で彩られており、生活感はありません。

じられなかった。絨毯やタペストリーには異国を思わせる刺繍がほどこされ、壁には油彩の風景画が飾られている。

(何がどうなっているのかしら)

見知らぬ男にくちづけをされ、目を覚ましたと思つたら、馬車に乗せられ二時間ほどの距離を疾走し(男とは別々の馬車に乗せられたため、ウルリーカはひどく不安な気持ちを味わつた)、こうして今、ここにいます。

周囲の景色を見る間もなく連れてこられたためはつきりとはわからないが、どうやらここは相当大きな建物らしい。「お着替えを」と言つて使用人らしき女がばたばたと出入りし、彼女の着ていた白いドレスをはぎとり、この若葉色のドレスに着替えさせた。なんのための着替えなのかわからずに困惑していたところへ、先ほどの黒髪の男が、こちらも正装に身を包んであらわれたのだ。

そしていきなり手にしていた本を開き、童話の朗読をはじめたのである。さっぱり意図がつかめなかつたので、ひとまずウルリーカは眠りに落ちる前に見た光景へ思いを馳せた。

(クルックシャンクの離宮でお誕生日のお祝いをしていたところに、エーレンベルク侯爵の兵がせめてきたことは、おぼえているわ。でも、そのあとのことがわからない……)

父は？ 母は？

召使たちはどうなったのだろう。謀反が起きたあのあとは？

(わたしが目覚めたあの場所は、クルックシャンクの離宮によく似た場所だったわ。でも、あちこち埃だらけで家具も朽ち果てていたから、別の場所かもしれない……)

ウルリーカはちらりとうかがうようにして、窓辺に立つ黒髪の男を見た。レースのカーテンを引いて窓の外を眺めている男は、相変わらず、彫刻のような完璧な美しさを誇っていた。

(わたし、この方と……キスをしたのよね?)

彼がそんなことなどまるでなかったようにふるまうため、つい質問する機会を逃してしまつていたウルリーカだったが、あれは彼女にとつて、生まれて初めてのキスだったのだ。夢うつつだったとはいえ、なかつたことにはできない体験である。

——あなたは糸車の針に指をさして死ぬのではありません。眠りに落ちるのです。

(まさか……、あのおばあさんが語っていたことと、何か関係があるのかしら)

男が朗読した童話の内容を反芻する。誕生と同時に魔女に呪いをかけられるなんて、ウルリーカとよく似ているではないか。

(そもそもどうしてこの方は、急に童話の朗読を?)

男が語つた内容は、ウルリーカが読んだことのない物語だった。

(もしかしたらここは別の国なのかもしれないわ。誰かが謀反からわたしを逃すために、あのクルックシャンクの離宮によく似た、ぼろぼろの塔に運んでくれたのかも……)

だとしたら、自分はベルタに戻らなくてはならない。なぜなら国に、父と母を残したまままだからだ。

「あの、すみません——」

「失礼いたします」

ウルリーカが口を開いたそのとき、部屋の入り口から別の女の声が響いた。亜麻色の髪の使用人が、伏し目がちに立っていた。

「お庭のご用意が整いました」

「ああ、わかった」

男が頷き、そうするのが当たり前であるかのように、ウルリーカに手を差し出した。

「行こう」

「——どちらへ？」

「君の目覚めを祝うため、庭で式典が開かれる」

「わたしの目覚めを？」

ウルリーカは瞳を丸くした。さっぱりわけがわからなかった。

彼女がいつまでたっても自分の手を取らないのを見て、男はウルリーカへと歩み寄り、その手を自らの腕に絡めさせた。さながら親しい関係の紳士淑女が、夜会で並んで歩くときのような姿勢だった。ウルリーカは夜会に出たことはないが、本で読んだことがあるので知っている。

いつか夜会や舞踏会に出られるようになったら、わたしも素敵な殿方とこんなふうに取り合って歩きたい。幼いころはそんなふうに見ていたのに、いざその機会がおとずれると困惑するばかりだった。

「あの、ここはどこなのでしょう。わたしは、なぜ、ここにいますでしょうか。わたしの両親がどうしているか、あなたはご存知ありませんか？」

「ヴィルヘルムだ」

「え？」

男が、琥珀色の瞳にウルリーカを映した。

「私の名前はヴィルヘルム。申し遅れてすまない」

「あ……はい。わたしはウルリーカと申します」

「知っている。君はベルタの姫君、ウルリーカ・ラ・サラ・リーゼロッテ・ダ・ベルタ」

「はい……」

ウルリーカはますます戸惑う。

「……ごめんなさい。失礼ですがわたしたち、どこかでお会いしましたか？」

「先ほどが初対面だが、君は我が国では非常に有名な存在だ」

「わたしが、有名？」

たしかにベルタの国内において、魔女に呪いをかけられた王女の存在は民に広く知れ渡っていたはずだ。けれど、まさか他国にまで同じように名を知られていようとは。

（いいことなのか悪いことなのかよくわからないわ。一国の姫が魔女に呪いをかけられるなんて醜聞しゆんな気もするし、でも代わりにベルタのような小国が有名になるのならいい機会な気もするし……）

「こちらへ」

「えっ、あっ」

腕をひかれてウルリーカは歩き出した。部屋を出て、廊下を抜け、エントランスホールへと出る。外へと続く扉に近づくと、しゃんしゃん……と鈴の音が聞こえてくる。

「この先で陛下がお待ちになつてゐる」

「陛下？ それはこの国の、国王様ですか？」

「ああ、そうだ。私の父上でもある」

「えっ」

「——ではヴィルヘルム様は、この国の王家の方なの？」

驚いたが、同時に納得もした。彼の上品な立ち居振る舞いは、きつと育ちの良さのなせるわざなのだろう。

（それならばどうしてわたしは、そんな方にキスされてしまったの？）

ウルリーカが問おうとした瞬間、使用人たちによつて扉が開かれた。途端にあふれんばかりの光があたりを照らし出す。

わつと歓声があがり、次いで華やかな音楽があたりに鳴り響いた。青空に向かつて突き抜けていく管楽器の音色、女たちの歌声、思い思いにざわめく人の声。

扉の向こうに延びるのは、真紅の細長い絨毯だった。それを取り囲むようにして踊り子たちが舞い、彼女らの動きに合わせて鮮やかな紫色の薄布がふわりと広がる。さらにその向こうには、それぞれめかしこんだ男女がたくさんいた。いずれも贅沢に着飾っており、貴族階級の人々であると思われる。

空から白い花びらが降ってきた。バルコニーから白い巫女装束に身を包んだ女たちが花びらをふりまいているのだ。ヴィルヘルムが楽隊の奏でる音楽のテンポに合わせてようにして紅の絨毯の上を歩き出した。彼と腕を組んでいるウルリーカも、必然的に歩き出すかたちになる。

（歓迎されているみたいだわ。どうして？）

クルックシャンクの離宮で静かに暮らしてきたウルリーカにとって、それは目もくらむような華やかさだった。

「あそこにおられるのが、我が国の国王陛下だ」

ヴィルヘルムがウルリーカにしか聞こえないような小さな声でささやく。

示された先にあつたのは、輿に座った痩せた男の姿だった。

見るからに優しそうな、頬にえくぼの浮かんだ中年男である。髪は白髪まじりの灰、瞳はヴィルヘルムと同じ琥珀色をしていた。

瞬間、緊張にこわばつたウルリーカの喉が震えた。

「お、お待ちください、ヴィルヘルム様」

一步、一步、ヴィルヘルムとともに歩きながら言う。

「一国の国王陛下にご挨拶するのなら、わたしは知っておかなくてはいけません。わたしの国……ベルタは、どうなつたのですか？ なぜ、わたしはここであなたのお父様に……国王陛下にお目通りを？」

ヴィルヘルムはわずかに躊躇したあと、まっすぐにウルリーカを見て、言った。

「それは君が、亡国ベルタの姫だからだ」

その言葉に、ウルリーカはわが耳を疑った。

「亡国、ですって？」

「ベルタは滅びた。君の父上の政権に不満を抱いた者たちの謀反にあつて、国王が失脚したんだ。王も王妃もどちらも死んだ。代わりに建った国が、このエーレンベルク。私の姓でもある」

「な……何をおっしゃっているのですか？」

ウルリーカは思わず立ち止まっていた。体中の体温が急激に下がっていくのを感じる。

「そのようなことが、一昼夜で起こるはずがありません」

「一昼夜？」

「だってわたしが眠っていたのは、そのくらいの時間のはずですもの」

「……驚いた」

言葉どおり、ヴィルヘルムは本当に驚いているようだった。

「君は自分が眠っていた歳月を知らないんだな。いや、これはむしろ私の説明不足か。申し訳ない」

「……どういふことですか？」

「君は百年、眠っていたんだよ」

「ひゃ……」

——百年？

「先ほど童話を聞かせただろう」

ヴィルヘルムが続ける。

「あれは君の存在を題材とした童話なんだ。ベルタは滅びたが、ベルタの国土と宮廷はそのまま使われているからね。百年の眠りについた君は、あの石の城でいばらに守られて歳月を過ごした。ただひとり、選ばれし者のくちづけによって目覚めるといふ言い伝えとともに」

「くちづけ……」

「これはエーレンベルクが君を手に入れた祝いの宴だ」

「手に入れる……とは、いったい……」

「いにしえの王家の血筋を、我々の掌中におさめることができた祝いだ。君はこれから、この国の政治の大事な道具となる」

ウルリーカは言葉を失った。

政治の、道具。

自分の血が、政治的価値を持つことは知っていた。いつかしかるべきときがきたら、婚姻とかかたちで国の発展に貢献しなくてはならないということも。それがまさか、このようなかたちで果たされることになるなんて——

（お父様とお母様が、亡くなられた？ ベルタがなくなった？ まさか、嘘よ、そんな……）

キーン……。耳の奥で嫌な音がした。心臓が脈打ち、その反動で体が震える。

迫ってくる。

抗うことのできない巨大な波が、ウルリーカの体を包み込もうとしている。

「ウルリーカ？」

ヴィルヘルムに名を呼ばれたとき、ウルリーカは既に、意識を手放していた。

十

どおん！

どおん！

——謀反でございます。

——エーレンベルク侯爵の兵が武器を手をにせめてまいりました！

(エーレンベルク……。ベルタの代わりに建った王国の名前……)

そして。

——私の姓でもある。

ウルリーカに現実を突きつけた、形のいい唇が脳裏によみがえる。エーレンベルク侯爵が謀反を起こし、そしてあの人がその末裔だというのなら、ウルリーカにとって彼は仇だ。

だが、告げられた言葉を、すべてうのみにすることはできなかった。あるいはうのみになどしたくなかった。王国が滅び、父母が死んだなんて……信じたくない。

ヴィルヘルムはたしか、ウルリーカが百年の眠りについてはいたと言っただろうか。

もしそれが事実だとしたら大変なことだ。胃の底がずしんと重くなってくる。

(どこからが現実で、どこからが夢なの？ もう、わけがわからない……)

そのとき——指先にぽつと、あたたかいものが触れた。

人の手のようだった。

ウルリーカの指に触れ、手を包み込むようにしたそれは、どうやら横たわっていたらしい彼女の肩を持ち上げ、ふわりと優しく抱きしめる。

(誰？ あたたかい……)

不安に凝った心を、ほぐされていくような感覚だった。ウルリーカは思わず、そのぬくもりに身を委ねる。

手が、ウルリーカの髪を撫でた。慈しむような動きだった。手はやがて、ウルリーカの耳に触れ、頬に触れ、そして、唇へとたどりつく。

(まただわ)

前にもこんなことがあった気がする。あのときはどうなったのだけ……。思い出すことがひどく億劫だった。全身がだるい。

されるがままにあたたかな熱に体をあずけていると、ふいにウルリーカの唇に触れていた指が遠ざかった。

(あっ……)

まだ行かないで。反射的にそう思った瞬間、とろりとした熱いものが唇に触れた。

舌だった。誰かの舌がウルリーカの唇をねぶっているのだ。

上唇をなぞり、下唇を食み、舌先でちろちろとウルリーカの唇を散々愛撫してから、やっと唇を合わせる。

「ん……っ」

唇の隙間から割り込んできた相手の舌を、ウルリーカは戸惑いながらも受け入れた。拒むこともできたのにそれをしなかったのは、夢心地であったからということと、触れ合った舌から伝わる体温が心地よかったからだ。

口の中をくまなく舐められ、ただでさえ緩慢だったウルリーカの様子は、ますますまともにならなくなっていった。触れ合った舌はやわらかいのに芯があつて、濡れているのにあたたかい。

相手はウルリーカが唇を受け入れたことを察し、さらに動きを大胆にした。

「ん、んっ……」

大きく開口させられる。どちらのものともつかない蜜が唇の端からこぼれていった。舌を甘噛みされ、相手の口の中へと引き込まれて、まるでこれ以上の甘露はないとばかりにしゃぶられる。

「ん、ふっ……」

次の瞬間、それまで深くつながっていたふたりの唇が、ふいに離れた。

「……あっ」

まぶしい光に照らされて、ウルリーカは目覚めた。

十

「こ、ここは……」

知らない寝台の上だった。

天使の絵が描かれた天蓋から、紗の布が下りている。ウルリーカはふと枕元がたわんでいることに気がついた。

「……目が覚めたか」

ヴィルヘルムだった。

ウルリーカの枕元に腰かけ、彼女の顔を覗き込むようにしてこちらを見ている。

なんだか半分夢の中にいるような気がする。ひどくぼんやりとしながらウルリーカは訊ねた。

「……今、わたしに触れていたのは……あなたですか？」

「……………」

ヴィルヘルムは黙って髪をかき上げた。ふたりの間に沈黙が満ちたが、やがて観念したように彼が細く息をつく。

「ああ、私だ。今だけではない、君を百年の眠りから目覚めさせるときもキスをした」

「キスを……」

「だからこれで二度目だ」

そこでようやく、頭の中が覚醒かくせいしてくる。じわじわと恥はずかしさが追いついてきた。同時に自分がまだ横たわったままであることに気づき、あわてて起き上がる。

「あ、あの、どうしてそんな、キス、なんて……」

唇には彼とのくちづけの余韻が残っていた。しびれるような甘いぬくもり。夢うつだったとはいえ、よく知らない相手からのくちづけを受け入れてしまうなんて、はしたないことだ。

「眠りについた亡国の姫を目覚めさせることは、私の義務だった」

亡国の姫。その言葉を耳にした途端、胸の奥がひやりとした。

（そうだわ。わたし、お父様とお母様のことを聞かなくちゃ。ベルタがどうなったのか、きちんと訊たずねなくちゃ——）

「式典の前に、君に状況を説明していなくてすまない」

まるでウルリーカの心を読んだように、ヴィルヘルムが言った。

「あのときは、あの場で君に取り乱されるわけにはいかなかったんだ。結局、君は意識を失ってしまったが……仕方ないことだ。君は未だに、魔女の呪いに毒されている」

「魔女の、呪い……」

ベッドに腰掛けたままのヴィルヘルムが、その琥珀色の瞳でウルリーカを見た。

「君は生まれてすぐに、祝賀の宴に招かれなかった十三番目の魔女の呪いによって、十五歳の誕生日に糸車の針に指をさして死ぬことを告げられた。この事実には相違はないな」

「はい、ありません……」

「しかし君は十八の誕生日まで生き延びた。父君が君の身を案じて、国中から糸車を焼き払ったからだ。そうして君が十八になったとき、父君は、十三番目の魔女の怒りに怯おびえ、尻尾を巻いて逃げ出した十二番目の魔女ドロテアを見つけ出した」

「あ……」

彼の言うとおりである。

ウルリーカが十八歳の誕生日を迎えたあの日、父は腰の曲がった老婆ろうばを連れてきていた。

「十二番目の魔女は君に祝福を授けた。それは十八の誕生日を迎えてもなお、君の体をむしばんでいた呪いを、祝福にかえるまじないだったんだ」

「わたしの体をむしばんでいた呪い？」

「君はときどき、先日のように突然眠りに落ちてしまうことがあったそうだね」

「あ……ありました」

ウルリーカにはよくない眠り癖があった。どのような場面であろうと、ふいに意識が遠のいたと思つたら、知らないうちに眠りに落ちてしまうというものだ。この癖があるせいで父母はいつまでもウルリーカをクルックシャンクの離宮から出そうとしなかった。呪いが完全にとけるまでは安全ではないと、用心に用心を重ねていたのだ。

「その癖はおそらく、十五歳の誕生日を越えてから顕著けんちやくになったのではないか？」

「そ、そうかもしれません……。子どもときはこんなこと……、ありませんでしたから」

「これは我々の予想でしかないのだが、十五で死ぬはずだった君の体を守るために、十一人の良き

魔法の祝福と一人の悪しき魔法の呪いが拮抗し、その反発がそのようなかたちで出てしまっていたのではないだろうか。だから君の体は現在も、危険を感じると眠りに逃げる」

「でも、だからって、百年も眠っていたなんて、そんな……」

これまでの眠り癖は、どんなに長くてもせいぜい一晩が関の山だった。

「君が百年の眠りに落ちた日は、ベルタの王朝が陥落した日と符合する」

「え……？」

「つまりご両親が身まかり、君の命が危険にさらされたとき、魔法の祝福が君を守るために発動したんだ」

「どういうこと、ですか……？」

「君が眠りに落ちた途端、クルックシャンクの離宮を囲んでいたいばらが檻となつて、君と城を包み込んだ。それが、謀反を起こしたエーレンベルク兵の手から君の命を守つたんだ。だから君は今日まで生き延びることができた」

「で、では……、どうしてあなたは、クルックシャンクの離宮に近づくことができたのですか？ あなたがエーレンベルク侯爵の末裔なら、わたしにとつて危険な相手であるはずですよ」

「それはおそらく、私が君に害意を抱いていなかったからだろう。これまであの離宮に近づく者は、みな君を亡き者にしようとしていた輩ばかりだったから」

驚愕に言葉を失つたウルリーカに対して、なんてことなさそうに、ヴィルヘルムは続ける。

「魔法は君にこう告げてはいなかったか。君はくちづけによつて目が覚める、と」

「言っていたような気がします。でも……」

「祝福にかえられた呪いは、今でもまだ君の体を守り続けているようだ。君は自らの危機を感じると、先ほどのように眠りに落ちてしまおうらしい」

ウルリーカは瞠目した。

「そ、それを目覚めさせてくださるのが、あなたなの……？ わたしの国を滅ぼした、エーレンベルク侯爵の末裔の……あなたなの？」

震え声のウルリーカの問いに、ヴィルヘルムはため息で応じた。

「そうだ」

「つまりヴィルヘルム様とウルリーカ様は、運命の相手同士であるということですよ」

「っ！」

急に知らない男の声が響いて、ウルリーカは身構えた。

薄布を隔てた向こう側に、いつの間にかふたつの人影が立っていた。

ウルリーカは息をのんだ。ふたつの人影のうち、片方の人影に見覚えがあったからだ。ウルリーカが気を失ってしまった式典で、真紅の絨毯の向こう側にいた男である。やや痩せぎすの優しそうな中年男性は、ヴィルヘルムが国王陛下と呼んでいた人物だ。

その隣にいるのは、人好きのしそうな背の低い少年だった。まだ十五、六歳ほどだろうか、ふわふわした栗色の髪と、同じ色の瞳を持っている。鼻先にはいまにもずり落ちそうな丸い眼鏡。ぶかぶかのローブに身を包み、腕には分厚い本を抱いている。

緊張にこわばるウルリーカを見て、気遣わしげに国王が目元をゆるませた。

「目が覚めたのだね、ベルタの姫君」

「……あ……」

「さすが、たくさんの魔女が祝福を授けただけはある。美しい姫君だ」

「……………」

ウルリーカが露骨に警戒した様子だったので、国王は苦笑した。

「どうか怖がらないでほしい。我々は君を歓迎したいと考えているんだよ」

歓迎——知っている、ウルリーカがヴィルヘルムのくちづけによって目覚めた瞬間から、エーレンベルクの人々は彼女を歓迎してくれていた。

けれど、どうして？ 自分が亡国の姫なのだとしたら、彼らにとつてはどうでもいい存在のはず。まして百年も眠っていたのだとしたら、ウルリーカなどいてもいなくても何の支障もないはずだ。

「百年も同じ一族が治世をしていると、多かれ少なかれ、過去を懐かしむ者が出る」

ふいにヴィルヘルムが口を挟んだ。

「当時を知る者はほとんど生きていないが、伝承や昔ばなしなどを伝え聞くだけで『あのころはよかった』と、そういう不満が広がっていくんだ。まして我々は謀反の末に建った王家の一族……ここでいにしえの、正統な王家の血を取り入れることができれば、それに勝る解決策はない」

「ヴィルヘルム」

国王が咎めるような声を出した。

「お前の言うように、彼女はいにしえの王家の姫だ。高貴な血筋の方なのだよ、もつと言葉を選ばないなさい」

「失礼いたしました」

「僕の占いでは、おふたりが結婚することが最良であると出ました」

親子のやりとりを遮って発言したのは、ぶかぶかのローブを羽織った眼鏡の少年だ。

「きっと姫君はヴィルヘルム様と結婚するために、百年のときを経たのです。そうです、そうに違いありません！」

「あなたは……?」

「あっ、申し遅れました。僕の名前はドロテア。あなたに最後の祝福を授けた魔女の、三代目です」

「三代目?」

ドロテアとは本来、女の名である。それに魔女とは、主に魔の力を操る女をさす。目の前にいる彼は、どう見ても男の子だ。

ウルリーカの驚いた顔を見て、なぜか少年は誇らしげに胸を張る。

「魔女の名前は世襲制なのです。僕はあなたに祝福を授けた、最後の魔女の子孫です」

彼は腕の中にあつた分厚い本をぱらぱらとめくりはじめた。

（最後の魔女って……わたしの目覚めには、キスが必要だって言った、あの……?）

「とにもかくにもおふたりは結婚するべきなのです。僕の星占いによればおふたりが結婚すれば王

国は未永く繁栄すると出ました。幸せに暮らせば姫君の呪いも、いずれとけましよう」

「と、いうわけなのだ、ウルリーカ姫」

国王が困ったように肩をすくめながら言った。

「君がヴィルヘルムのくちづけで目を覚ましたことには、きっと深い意味がある。突然のことで驚かれるのは承知の上だが、我々の申し出を受けてはもらえないだろうか」

(受ける、って)

ウルリーカの戸惑いを察したのか、エーレンベルク王がわずかに声を落とした。

「君とヴィルヘルムに結婚してもらいたいと、私は考えているんだよ」

(お父様とお母様を、殺した一族の方と、結婚——?)

ウルリーカが救いを求めるようにヴィルヘルムへと視線をうつすと、彼はさりげなくそっぽを向いて、ウルリーカのまなざしから逃れた。彼がこの結婚について、あまりよい印象を抱いていないことはすぐにわかった。

姫として王家に生まれた以上、いづれ望まぬ相手との結婚が待っていることは知っていた。けれどもまさかこんなかたちで、親の仇ともいえる相手に娶られることになるなんて。

優しくかった父と母を思い出し、瞬く間にウルリーカの濃緑色の瞳に涙が込み上げてきた。それを見て、その場にいた面々は困ったように顔を見合わせる。

「す、すこしだけ」

懸命に涙を堪えながら、ウルリーカは言った。

「すこしだけ、ひとりにしてください……」

「結構」

素早く応じたのはヴィルヘルムだ。

「世間知らずな姫君のわがままに付き合っているほど、我々は暇ではない。私や陛下の手元には、常に山のような政務があるんだ。——失礼するよ、ウルリーカ。あまり他人の手をわずらわせぬよう」

突き放すような口調とともにヴィルヘルムが出ていく。ウルリーカの目から、とうとう涙がこぼれた。

十

そうして絶望に打ちひしがれたウルリーカは、ひとりになったときを見計らってそっと部屋を抜け出し、突然のことに戸惑う御者を促してクルックシャンクの離宮へと戻ってきた。

二時間ほどの距離を疾走してもなお、ウルリーカの決意は変わらなかった。自分はこのにいてはいけない、滅びた国と父母の命に報いるため、ここからいなくならなくてはならない——

クルックシャンクの離宮はすでに朽ち果てており、たしかに百年の歳月を感じさせた。もともと色彩に乏しい石の城ではあったが、今では建物の足元に茂るいばらでさえも枯れて茶色くなっている。室内は当然のように散らかり放題でほこりまみれになっており、かつてウルリーカが暮らして

いたころの面影はどこにもなくなっていた。

やはり、自分がいた世界とは何もかもが違うのだ。

涙を流しながら階段を上り、屋上から身を乗り出そうとした、そのとき。

「やめなさい」

静かな声が出て、ウルリーカは振り返った。

「はやまるのはよしなさい、ウルリーカ。君に何かあったら、みなが悲しむ」
風に黒髪をかきまぜられたヴィルヘルムだった。

十

『あんな言い方をなさるからいけないですよ、まったく』

——つんつんした男の子の声が聞こえてくる。

ウルリーカは眠りの中にいた。

声だけは聞こえてくるものの、視界はかたく閉ざされたままだ。

そうだった、自分は身を投げようとクルックシャンクの離宮へ向かい、そこでヴィルヘルムに止められ、意識を失ってしまったのだ。

情けなくて、恥ずかしかった。

死のうと思ったのに死ねなかった。あまつさえ、塔のてっぺんから飛び降りる直前でことごと眠

りに落ちてしまった。

『どうしてあんな意地悪な言い方をしたんですか、ヴィルヘルム様』

『別にわざと意地悪な言い方をしたわけではない』

『いえ、あなたはわざとああいう言い方をなさいました！ あなたほど賢いお方が、相手がどう感じるかお構いなしにあんなうかつな言葉を口にするはずがありません。長い付き合いなんだから、僕だってそのくらいわかります』

(知っているわ、この声……)

男ふたりの応酬だった。片方の声の主はヴィルヘルムだ。気を失う前に聞いたのだから間違いない。もう片方の声はまだ少年の色を濃く残した男の声……たしか三代目ドロテアと名乗っていた彼だろ。

『彼女は亡国の姫君なんです。あなたの呪いを、唯一といってくれるかもしれない存在なんですよ』

『……私の呪いなど、別にとけなくてもかまわない』

『かまいません。その呪いがある限り、あなたは結婚しようとしなさいやありませんか！』

(ヴィルヘルム様が、呪い？ 呪われているのはわたしではなかったの？ どういうこと?)

ガタガタと、わずかな振動が伝わってくる。自分はどうやら馬車に乗せられているようだ。

『それで、どうして姫君はまだ目覚めていないんですか。ヴィルヘルム様、キスをしなかったんですか？』

『軽くした。だが、軽いキスでは目覚めないようだ。今ここで目覚められても余計な混乱を招くだ

けだから、宮廷に戻ってからきちんと起こす』

『うーん、王子のキスもいろいろと細分化されているようですね。さすがは大魔女の呪いだ、興味深いです』

ふむふむ、と頷いたあと、ドロテアはまたしても声を荒らげた。

『でもですね、ヴィルヘルム様。姫が目覚めたら今度はもう意地悪を言ってはいけませんよ、優しくしてあげてください。女の人というのは繊細なんです、ましてこの姫はあなたの将来を左右するかもしれないのですから、それはもう花よりも大切に扱わないと』

『どうせ彼女も、本当の私を知ったら不気味に思うはずだ』

ヴィルヘルムがひどく重たい口調で言った。

『ならば結婚など強いずに、別のどこかで暮らさせてやるのが本人のためだ。クルックシャンクの離宮を片付け、彼女が自殺できないよう設備を整えてから、使用人をつけてもどしてやるべきかと――』

『それはあなたが勝手に怖がっているだけでしよう、ヴィルヘルム様』

ドロテアがきつぱりとした口ぶりで、ヴィルヘルムの発言を遮せきとった。

『本当の自分を知られることを、おそれはいけません。それがあなたに与えられた試練でもあり、彼女に与えられた試練でもあるのです』

『……………』

『大丈夫です。僕の占いには、おふたりは必ずこの困難に打ち勝つと出ていますよ』

(試練？ 困難？ どういうこと……………?)

問わなくては。目を開けて、状況を確認しなくてはならないと、わかっていた。

けれど。

(あ…………)

またしても波に似た感覚がウルリーカを襲い、彼女の意識は引きずられるようにして、よりいっそう深みへと落ちていくのだった。

二章 目覚めのキスは甘く深く

ウルリーカのよくない眠り癖。

どのような場所であろうとも、ふいに意識が遠ざかるような感覚に襲われたと思つたら、ことんと眠りに落ちてしまう悪癖だ。子どもときはそのような症状はほとんど出なかったのだが、死ぬはずだった十五の誕生日を迎えて以降、顕著となり、人々はそれを魔女の呪いのせいだと解釈した。しかしいずれもそういつたときの眠りは浅く、声をかけられたり、揺さぶられたりするだけで目覚める程度のものであったが——まさか百年も眠り続けてしまったなんて。

——眠り姫の目覚めには、王子のキスが必要です。

もしもこのままウルリーカがヴィルヘルムと結婚したとしたら、彼女は両親の命を奪ったエーレンベルク侯爵の末裔の築いた国で、のうのうと生きていくことになるのだろう。ウルリーカに求められているのはきつと血の存続だ。

ならば彼女は——親を殺した相手の血を繋ぐため、子を孕むことを強いられるのだろうか。ぞつとした。それは絶対に、よくないことだ。

可能ならばエーレンベルクの国王に一度直談判をしよう。そして言うのだ。

(結婚を、お断りしますと申し上げるの。そのせいで着の身着のまま追い出されたとしても、ちよ

うどいいわ。だってここは……ベルタを滅ぼしたエーレンベルク侯爵が築いた宮廷なんですもの……)

「ん……」

ウルリーカは浅いまどろみの中にいた。

(背中が、あたたかい……)

起きなくてはと思う反面、まだ眠っていたいという欲求が込み上げる。後ろから誰かに抱きしめられているようだった。

首筋に、やわらかいものが触れる。誰かの唇がウルリーカの肌をなぞっているのだ。舌を使わずに、感触だけ楽しむようにしてゆつくりと、彼女のうなじにくちづけを繰り返す。

「ん、う……」

思わず、吐息がこぼれる。くすぐったいような、むずがゆいような、不思議な心地だ。

唇がそつと、ウルリーカの耳を食んだ。小鳥がついばむような動きはどんどん大胆になっていき、やがて歯を立てて耳朶を甘噛みされ、舌を耳の奥にねじこまれる。

(あっ……)

ウルリーカは身をすくませた。それにつられるようにして相手も一瞬だけ息を止める。けれども彼女の呼吸に合わせるようにして、優しい愛撫を耳へと繰り返した。

相手はウルリーカの耳を食んだまま、背後から回した大きな手で、彼女の胸を包み込んだ。

「んっ……」

耳をなぶられながら、胸のふくらみをゆつくりと揉みだかれる。

「……………」

大きな手に包み込まれると、それだけで胸全体に甘いうずきが広がった。感触を味わうようにぐにぐにと捏ねられて、神経が徐々に、そのふくらみの先端へ集中していく。

(やめて……そんなところ、触っては、だめ)

喘ぎ声は漏れるというのに、明確な拒否を示す言葉だけは、なぜか出てこなかった。きつとウルリーカの体はまだ半分眠っているのだ。だから、言葉を発することができないのだ。

「ん、んんっ……………」

代わりに相手の行為を歓迎するような声が漏れてしまい、自分で自分に驚いた。

(どうして？ なぜ、こんな……………)

男の手は——その大きな骨格から、相手が男であることはもう疑いようがなかった——、ウルリーカの胸のやわらかさを堪能するように弄んでいる。

ぐにぐにと捏ね繰り返して、たつぷりと時間をかけて彼女の先端を尖らせていく。しぼるように乳首をくびり出されると、先端に熱が凝った。それなのに男は、未だその頂には触れようとしない。

その周囲の柔肉を、寄せ集めて楽しんでいようだ。

「は、ふ……………」

終わりの見えない行為は怖かったが、時間をかけて丹念にほぐされていくと、体が勝手に相手の体温を受け入れはじめる。同時に乳首はますますかたく、ぴんと張りつめていった。

いじられているのは胸なのに、腰の奥がきゅんと痛いような感覚に襲われた。徐々に危機感が蓄積していく。

(だめ……………これ以上はもうやめて……………!)

そう思った刹那、これまで背後から絡みつけていた体温が消えた。

(……………え?)

まさか自分の願いが伝わってしまったのかと——本当にやめられてしまったのかと、急に突き放されたような喪失感を抱く。

(……………いなくなってしまったのかしら)

ぎしっ、と。

ベッドがきしむ音がした。次いで彼女の体に覆いかぶさるようにして厚い胸板が重なってくる。

そこでウルリーカははじめて自分がベッドに横たえられていることに気がついた。そして体を重ねた相手が衣服を脱いで、肌をあらわにしていることにも。

ウルリーカのほうは夜着に身を包んでいるようだったが、先ほどいじられて尖った乳首が、空気を感じて震えるほどには薄着らしい。

男はウルリーカの体をすっぽりと抱きしめ、再び胸をやわやわと揉みはじめた。触れた男の肌はなめらかで、それでいて弾力があつた。

「う、ん……………」

男の手がウルリーカの乳房の先端を、親指でこりつとつぶすようにして動く。それまでずっと焦

らされていたためか、びりとしびれのようなものが背筋を駆け抜ける。

「ふっ……！」

刺激に思わず身をよじらせると、男が全身を使ってウルリーカの体を押さえ込んだ。

こり、こり、こり……

指先で乳首を転がされる。

「ん、や、ああっ……！」

男の手の中で、自分の乳房が自在に形を変えていくのがわかった。時折、気まぐれのように乳頭をつままれ、つねられる。爪ではじかれたと思つたら、乳輪に押し込むようにねじ込まれたり、指で上下にしごかれたり……

(起きなくちゃ)

目を開けて、やめてくださいと頼まなくては。

わかっているのに、目を開くことができなかった。まるで何かの力で閉ざされてしまったように、眠りから逃れることができない。

(どうして、目覚めることができないの?)

「ふ、うっ……！」

すっかり敏感になった胸の突起は、布にこすれるだけでもぞくぞくとした喜びを感じるほどになつていた。

(いや……こんなの、だめっ……！)

だって自分は、眠っているのだから。それなのに顔も見えない相手に、好き放題にされるわけはいかない。

(このまま、最後までされてしまったら、わたし……！)

そうしたら自分はもう、純潔の乙女ではいられなくなってしまうのだ。

男はウルリーカの心情が追い詰められていることを察したのか、急に胸に触れていた手をひっこめた。

(……やめてくれたの……?)

と思つたら、今度は彼女のふともものあたりを撫ではじめた。

するりと衣服の間からすべり込んできた男の手は、ウルリーカの内腿をいたわるように撫でさす。布地でさえほとんどふれることのない場所に触れられ、ウルリーカは知らない感覚にぞくぞくした。それは恐怖でもあり、嫌悪でもあった。しかしその中に秘められた快楽があったことは、このときの彼女には知る由もない。

(い、いや)

すべり込んできた手は、ためらいなく彼女の秘所へと向かっていく。

(いやっ……)

ゆるい下着の内側に侵入した男の手は、ウルリーカの薄い茂みに到達し、秘められた入り口をゆっくりと指でなぞる。

くちゅっ。